

かたりべ 62

豊島区立郷土資料館だより

豊島区で生まれた幻のやきもの「竹本焼」が郷土資料館に寄贈されました！

今年三月一四日、故中島英雄氏の竹本焼コレクションおよび中島家文書、江戸明治期の版本などの関係資料が、英雄氏の妻すぎ様とご遺族のご好意により、豊島区に寄贈されました。

竹本焼は、盆栽愛好者の間で希少品として珍重されていますが、一般にはあまり知られていないやきものです。竹本焼とは、明治初年から大正期にかけて旧旗本の竹本家が三代(要斎・隼太・卓一)にわたって作った陶磁器をいいます。特に名陶工といわれた隼太の作品は、芸術的に高い評価をうけ、国内外の博覧会で数多く受賞するなど、当時知名度も高かったことから、一般に竹本焼といえは隼太の作品をさすことが多いようです。

西欧の製陶技術を積極的に取り入れた工場は、区内高田一丁目の竹本家の屋敷「含翠園」内にあり、最盛期には一二十名の職人がいました。またやきものに必要な水は、敷地内から豊富に湧き出る清水を利用し、土は瀬戸などから取り寄せたほか、地元雑司が谷・落合の粘土も使用していました。竹本焼はまさしく豊島区の水と土から生まれたやきものであり、近代の地場産業としても貴重な郷土資料であるといえます。

竹本焼では濃厚な釉薬をかけた盆栽

鉢類が多く作られ、直径二〇cm程度の小品から三cm足らずの小品まで多種多様な鉢が作られました。これは明治の政治家財界人の盆栽ブームが背景にありましたが、竹本家が熱心な園芸愛好家であったことも関係していると思われます。

そのほか工場では土管・煉瓦・製糸用具なども一時期製造されていましたが、実態は不明です。また三代目になると、工場は雑司が谷三丁目に移転し、碍子(がいし)を専ら製造していたようです。

中島英雄氏(昨年二月九五歳で死去)は、昭和初年から約五〇年間雑司が谷に住み、作家秋田雨雀など地元文化人と親交をもち、町会長を務めるなど長く地域の文化活動に貢献されました。



竹本焼を前に記念撮影 右から2番目が中島英雄氏 昭和29年5月2日撮影



昭和一四(一九三九)年に郷土誌『雑司谷若葉集』において初めて竹本焼を紹介しています。二七年には竹本焼保存会を創立して会長を務め、私財を投げ打って竹本焼の収集・保存と研究に取り組みました。さらに区主催の文化祭やデパートなどで竹本焼展覧会を開くなど、竹本焼の再評価に尽力されました。

今回寄贈された七〇余点に及ぶ中島コレクションは、盆栽鉢をはじめ煙管(きせり)・筭(こうがい)・杯などこれまでほとんど知られなかった隼太の作品が含まれており、以前に地元住民から当館に寄贈された数点の竹本焼とあわせて、今後の竹本焼研究の進展が期待できます。

* * * * *

郷土資料館では、一〇月二二日(金)一月一三日(日)の会期で、「竹本焼と園芸・盆栽文化」展(仮称)を開催し、中島コレクションを一堂で紹介する予定です。どうぞご期待ください。(横山)

【事業報告】二〇〇〇年度第三回収蔵資料展

「思い出は資料館へ」を開催して

二〇〇〇年二月二日（金）から二〇〇一年三月三十一日（土）まで開催した展示を報告し、これからの展示で気をつけたいことを考えたいと思います。今回、実物資料一三六件（約三〇〇点）と写真パネル四六点を展示しました。実物資料は全て当館が所蔵するもので、主に一九九〇年から二〇〇〇年に区民の方から寄贈されたものです。そして、展示した資料の約九割は、今回が初めての公開になりました。では、展示の構成を振り返ってみましょう。

- 1 きものを着る
 - (1) おとなも子どもも (2) 針仕事はくらしの心得 (3) 藍色の仕事着
 - (4) おしゃれのわき役
 - 2 からだを暖める
 - (1) 暖房具さまざま (2) 小さなぬくもり
 - 3 ごはんを炊く
 - (1) わが家の米びつ (2) ご飯が炊けますか (3) お釜と炊飯器
 - 4 思い出は資料
 - (1) どれを使いましたかーアイロンの変遷ー (2) 写真のなかの資料
- (3) 資料と語る

展示資料としては生活用具類を中心としたため、見覚えのある資料が多いことが特徴でしたが、見学者のなかには名称を忘れていたり使用方法を知らないという人も多かったです。ふだん、もの（＝資料）の寄贈を受ける際には、それをどのように使っていたのか寄贈者からうかがう



ことはもちろん、それを実際に使用している写真の存在を確認するよう心がけていますが、その結果、今回の展示では四点の写真の提供をいただくことができました。記念写真と違って日常生活のひとつまはあまり写真にはないものですが、今後も根気よく探していきたいと考えています。

さて、この図は、展示した資料が区内のどこに住む（住んでいた）方から寄贈を受けたものかということを表しています。ほぼ区内各地からの寄贈があることがわかりますが、区内の西と東、多少の疎密もみられます。資料寄贈者は六一名でしたが、今回、これらの方々に展示の開催をお知らせしたところ、すでに亡くなっておられたり転居したために通知が届かなかった方もいらっしゃいました。資料の寄贈者は、資料がどのように利用されているのか知りたいはずですが、資料館では、資料を利用することを前提に寄贈を受けますが、その利用のひとつのあり方として展示があるのです。毎年増加していく資料の寄贈



展示構成 1-(1)・(2)・(3)

件数とそれらを収蔵する場所の不足ということから、資料の洗浄と整理が思うに任せない状況でした。そのため、今回の展示でご覧いただいた資料のなかには、寄贈を受けたときからずいぶん時間がたってしまったものもありました。実施した展示説明会のとき、「亡き母が資料を寄贈していただきましたので来ました」という寄贈者の娘さんがお越しになりました。企画者としては嬉しくもあり申し訳ない気持ちにもなりました。資料館と区民の方の距離を速くしないために、寄贈資料をなるべく早い時期にお披露目するよう心がけていきたいと思えます。（福岡）

《新・豊島氏紀行》(その3)

一 石神井公園・三三寺池付近の伝説

練馬区石神井公園の一面にある三三寺池の付近には、豊島氏に関わる伝承や遺跡が数多く残されています。

三三寺池の南の崖には城館と見られる遺跡があり、そこは豊島泰経を主とする石神井城の跡であるとされています。

一四七六(文明八)年、関東管領山内(やまのうち)上杉氏の執事、長尾家の跡目相続争いに端を発した「長尾景春の乱」は、南関東の武士団を巻き込んだ大きな戦乱となりました。

長尾景春は上杉氏の執事、長尾景信の子でしたが父の死後、叔父の忠景がその職に就いたため、跡を継ぐことができませんでした。そこで景春は、古河公方足利成氏と通じて上杉顕定に背き、戦を仕掛けました。一時は武蔵五十子(現在の埼玉県本庄市付近)で顕定の陣を襲い、敗走させるなど、反乱は成功するかに見えました。扇谷(おうぎがやつ)上杉氏(定正)の家老である太田道灌の活躍により失敗に終わります。

当時、豊島氏は南関東の有力な武士団で、現在の北・板橋・練馬などの石神井川流域の諸地域を支配していました。その豊島氏の当主であった泰経は、景春の

反乱軍に加わり各地を転戦しますが、一四七七年、江古田・沼袋(現在の中野区付近)の戦いで太田道灌率いる敵軍に大敗を喫します。その直後、泰経は石神井城に立てこもりますが、道灌軍に攻められ落城します。ここから数々の豊島氏に関わる伝説がはじまります。

三三寺池北側に「姫塚」・「殿塚」という二つの塚があります。「殿塚」は石神井城の戦で敗れた豊島泰経の遺骸を葬った塚であると言われられており、近くには大きな松の木が植えられていたと云います。それに関連して、太田道灌に城を包囲された泰経が、家宝の金の鞍をつけた白馬で三三寺池に入水したという伝説も生まれています。また、もう一つ「殿塚」の西方にある「姫塚」(下の写真)にも似たような伝承があります。泰経には照姫という娘がいて、落城による父母の最期を悲しんで三三寺池に入水したその遺骸を葬ったものが「姫塚」だといふものです。そして、照姫についても金の鞍を背負って入水したと語り伝えられています。これらの伝説を伝え聞く地元の人々が、明治の末と大正の初め、昭和の初めに「金の鞍」探しを行いました



が、何も発見されていません。

このように、石神井城の落城という出来事から、泰経・照姫・金の鞍・三三寺

池を結ぶ伝説が生まれているのです。

照姫は、地元の祭りやお土産物の最中などにもなっていて有名ですが、実在の人物であったかは疑問視されていて、中の資料からはその存在を示すものは見つけられていません。ただ、三三寺の縁起の中に「照日上人」という名が見られることから、別の言い伝えでは「姫塚」は照姫の遺骸を葬ったものではなく、三三寺の住職であった照日上人(定有)の墓で「照日塚」といわれるものだとされています。この「照日塚」が「てるひづか」と呼ばれていたとすれば、石神井城の落城伝説と結びついて、音が似ている照姫(てるひめ)という人物を生み出したということも考えられます。

中世の豊島氏に関わる史実は、いまだ未解明の部分が多く、これからの研究の進展に待つところが大きいのですが、このような豊島氏の滅亡にまつわる様々な伝説も、人々の興味・関心を歴史の解明へと導くものとして、大切にしていきたいものです。(伊藤)

「☆三三寺池・殿塚・姫塚・石神井公園へのアクセス: 西武池袋線石神井公園駅南口より徒歩25分/西武池袋線石神井公園駅より上井草経由荻窪行きバスでJA東京おおば前停留所下車。または西武新宿線上井草駅より石神井公園行・長久保行きバスで三三寺池停留所下車」

◆◆郷土資料館なんでもQ&A◆◆

高田農商銀行襲撃事件

Q 「かたりべ」五七号の「Q&A」に帝銀事件のことが出ていましたが、戦前にも豊島区に銀行強盗があったと聞きましたか？

A 一九三五（昭和一〇）年一月六日におきた高田農商銀行襲撃（強盗未遂）事件のことです。高田農商銀行は一九〇〇（明治三三）年に創立されたもので、高田本町一三二〇（現・雑司が谷二一―一六）の、目白通りが不忍通りと分岐する手前北側にありました。

この事件は朝九時半頃、開店早々におきました。七日付けの『東京朝日新聞』（下の図）は次のように報道しています（「」内は引用者）。

突然勢ひ込んで入口から入って来た鳥打帽二人の男がそのまゝ、右手の押し扉から事務室内に侵入した、先に立ったは二十四五歳茶のレインコート変装用の色眼鏡をかけてゐたがギョツとして注視する四人「行員」を睨みながら躊躇なく足を進めて勘定台に近づき木柵から一步踏み入れると同時に右のポケットからピストルを掴み出

し右手をのべて腰をかゞめ山口支配人にピタリと狙ひをつけ、同時につゞく背の低い同年輩空色洋服の男は右手の短刀様の凶器を抜き放って振りかざした。「略」辻君（出納係）はとつきに裏口へ電話を掛けに駆け出した。これを見たピストルの男は明かに狼狽の色を見せ手を延ばせば残りの三、四百円の札が掴み得るにも拘らず相棒を振り向きながら「オイ駄目だ、電話だ電話だ」と早口に

いひながら後退やがて身をひるがへして侵入口から出ながら支配人に向って「おどかしだよ」とニヤニヤ不気味に笑つて見せた。この間約五分。男はピストル（実弾が入っていた）を二度撃とうとしましたが、幸い不発でした。結果的には行員の身体や金銭には被害のない、全くの未遂事件で終わりました。

犯人の一人が、一二日、神戸で逮捕され、アナキスト（無政府主義者）のグループ、日本無政府共産党の資金調達のための犯行であることがわかります。特に高（特別高等警察、共産主義など反体制思想・運動を取り締まる警察）は、これを好機として、同党や事件とは関係のない者もふくめて、全国で約四〇〇人のアナキストを検束しました。その後ほ

一カ月にはわたって、新聞はセンセーショナルな報道を続けました。日本のアナキズム運動は、一九二三年の関東大震災の時に、最大の指導者・大杉栄を憲兵隊の虐殺によって失い、ま


た、ロシア革命の影響による共産主義（ボルシェビズム）の勢力拡大もあって、衰退しつつありました。この弾圧は、戦前の日本アナキズム運動の終焉を画することになります。

日本無政府共産党の関係者は他の強盗予備事件や秘密を漏らしそうなメンバーを殺害した事件などによって起訴され、一七名が有罪判決を受けます。殺人は別として、その他は、この高田農商銀行事件を除いて実行にいたらないで取り止めたものです。最大の罪となったのは、日本無政府共産党を組織したことそのものについての治安維持法違反でした。治安維持法は「国体変革」（天皇主権の政治体制を変革する）という考えそのものを罪（最高は死刑）とする法律でした。高田農商銀行事件の事例も、銀行強盗未遂そのものよりも、それを「国体変革」の目的で実行したことを問題としました（もっとも、日本無政府共産党は、天皇制への対処については言及していませんでしたが、裁判所は、治安維持法違反を認定しました）。

拳銃と短刀を翳し 今朝銀行を襲撃


男女行員の機敏な防戦に 「駄目だ」と断念逃亡

目白に二人組



目白の朝日銀行に、今朝（六日）朝九時半頃、二人の男が襲撃した。襲撃者は拳銃と短刀を所持し、行員を襲撃した。行員は機敏な防戦を行い、襲撃者は断念して逃亡した。目撃者は、襲撃者が二人組であったと述べている。

息詰る五分間 地理を研究した犯人



地理を研究した犯人

この襲撃事件は、犯人が事前に地理を研究していたことが明らかになった。犯人は、銀行の構造や出入口の位置を熟知しており、襲撃の際に非常に機敏な行動を見せた。この五分間の間、犯人は行員を襲撃し、金銭を奪取しようとしたが、行員の防戦により未遂に終わった。

二度も不発
山口支配人語る

山口支配人は、襲撃の際に二度も発射を試みたが、どちらも不発であったと述べている。この間、行員は冷静に防戦を続け、犯人は最終的に断念して逃亡した。この事件は、戦前の日本に於ける銀行襲撃事件の一つとして記録されている。

（あおき）

浮世絵師・歌川豊春と歌川派

当館では、豊島区の歴史を知る手掛かりとして、浮世絵の収集を行って

います。江戸近郊農村だった豊島区内には、

染井の植木屋、高田姿見橋の蛸、鬼子母

神など江戸っ子人気の名所スポットがたくさんありました。四季折々の花見、社

寺参詣に、人びとはこぞって出掛けまし

た。浮世絵にはそうした名所風景がいきいきと描かれています。また風景画だけ

でなくこうした名所を背景にした揃物

(シリーズもの)の美人画も数多く製作されました。江戸の庶民の様子をダイレク

トに私たちに伝えてくれるのが浮世絵な

のです。左の浮世絵は、三代目歌川豊国(国貞)による「江戸名所百人美女染井」です。安政四年(一八五七)頃の作品だと思われ

ます。江戸各地の名所をバックに、風情

ある美女達が描かれるシリーズです。例えば、浅草寺門前の茶店の看板娘、十軒

店で雛人形をもて遊ぶ町娘。染井の菊

見で出会った美女は縁で足を洗う艶っぽい姿でした。江戸後期にこうした浮世絵を描いて大



3代目豊国(国貞)の美人画は、江戸時代後期に一世を風靡しました。郷土資料館所蔵

変活躍したのが、

歌川派と呼ばれる浮世絵の一派

です。その始祖と言われている

歌川豊春(うたがわ 豊春)は、

南池袋の本教寺に眠っています。

歌川豊春は、名を昌樹、通称

は但馬屋庄次郎のちに新右衛門、号は一龍斎などと言います。享保二十年(一七三五)に但馬(兵庫県)豊岡で生まれたとも

も、豊後国(大分県)臼杵で生まれたとも言われます。また芝神明前の宇田川町(港区)に住んだため歌川を名乗ったと言わ

れています。文化十一年(一八一四)に八十歳で没して浅草で葬られました。明治四十年に寺院の合併移転に伴って豊春の墓も豊島区に移されました。

彼は、はじめに京都で狩野派の鶴沢探鯨(つるさわ たんげい)に師事して絵を学びました。のちに江戸に出て浮世絵師

となります。江戸では喜多川歌麿の師でもある鳥山石燕(とりやませきえん)に師事したという説が有力です。

豊春は版画の浮世絵よりも肉筆(手書き)の浮世絵を好んで描いたと言われ、

筆美人画や、役者絵に優れた作品をのこしています。また特に浮絵(うきえ)と呼ばれる西洋の透視遠近法を応用した風景画で知られています。それまでも遠近法

を用いた室内浮絵は描かれていましたが、豊春は、屋外風景である江戸名所や、銅版画を模写した外国風景の浮絵を描いて

江戸っ子の目を楽せました。彼の斬新な風景画は後に門下の歌川広重らによって大成されることとなります。豊春の弟子には役者絵で知られる歌川豊国(初代)と歌川豊広(初代)がいますが、彼らもそれぞれに優れた門人を育て、歌川派は大いに繁栄しました。



当館でも歌川派の浮世絵を何点か所蔵しています。常設展示パネルで豊島区の昔をしのぶことができます。図録や展示でも登場しますので、どうぞご覧ください。

(薬師寺)

2001(平成13)年度 郷土資料館年間事業予定

整理	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 資料整理月間 5/15(火)～7/16(月) 5/15(火)～6/18(月)…資料燻蒸・整理作業のため全館休館 6/19(火)～7/16(月)…収蔵展示室のみ閉鎖、資料整理・展示替え ◇ 榎本泰吉家寄贈資料の整理作業 ほか
調査	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 集団学童疎開現地調査 5/9(水)～10(木) 山形県上山市 ◇ 豊島氏研究会 資料集刊行に向けての調査(年5回) ほか
展示	<ul style="list-style-type: none"> ◇ ～5/13(日)「思い出は資料館へ」「豊島の歳時記」(一部展示替えして昨年度からの継続展示) ※7/17(火)～7/24(火) 展示替えのため臨時休館 ◇ 7/25(水)～9/30(日) 第一回収蔵資料展「戦中・戦後の豊島区—空襲・ヤミ市まで—」(仮) ※10/2(火)～10/11(木) 展示替えのため臨時休館 ◇ 10/12(金)～1/13(日) 第二回収蔵資料展「竹本焼と園芸・盆栽文化」(仮) ※1/15(火)～1/24(木) 展示替えのため臨時休館 ◇ 1/25(金)～3/31(日) 第三回収蔵資料展「新着資料展」(仮)
講座	<ul style="list-style-type: none"> ◇ 歴史講座(3回) 8/4・11・18 各土曜日 午後2～4時 「子どもから戦争を考える」 講師:大門正克氏 定員50名 7/5から電話申込み ※詳細は7/5号「広報としま」に掲載 ◇ 都電車庫見学会(2回) 8月中旬 ◇ 地域史講座①(3回) 10月～11月 各土曜日 午後 「富士塚をのぼる」(仮) 定員20名 ◇ 地域史講座②(3回) 2月～3月 各土曜日 午後 「村絵図をあるく—池袋村・巣鴨村—」(仮) 定員20名
刊行物	<ul style="list-style-type: none"> ○ 館だより「かたりべ」62号～65号(5月・8月・11月・2月) 各2000部 無料 ○ 新着図書情報 第1号～12号(月1回) 区内図書館など数十部 無料 ○ 収蔵資料展リーフレット(年3回) 各2000部 無料 ○ 常設展図録(第3刷) 10月予定 1000部 一部800円 ○ 研究紀要《付・2000年度年報》 第16号 12月予定 700部 価格未定 ○ 調査報告書 第14集 1月予定 700部 価格未定 『豊島の集団学童疎開資料集(7) 学寮日誌Ⅰ—東京第二師範付属国民学校—』
実習	7/25(水)～8/7(火)12日間 5大学から実習生6名受入れ

※ 都合により事業内容や開催時期が変わることがあります。詳しくは「広報としま」にてお知らせします。

かたりべ 62号
豊島区立郷土資料館だより
*
2001年5月31日
豊島区立郷土資料館
東京都豊島区西池袋2-37-4
TEL03-3980-2351

編集後記
かたりべ62号をお届けします。今年度から誌面をA4判に拡大して情報量を多くするとともに、読みやすい内容に少しずつ改善していきます。▼4月から「図書月報」を発行して、毎月百冊前後受入れておく図書資料の存在を皆さんにPRしていきます。▼5月6月は資料整理月間のため休館となります。ご理解・ご協力をお願いいたします。「横山」